北陸歴史探訪

金沢学院大学 名誉教授
東四柳 史明

第5回 長尾為景の越中進攻と守山城

射水平野・小矢部川から二上山（守山城）を望む（富山県高岡市）

戦国時代中期の永正15(1518)年４月、室町幕府管領細川高国の斡旋によって、越前守護朝倉孝景と加賀一向一揆の和議が成立し、加賀・越前国境の封鎖が解除された。だがこのことは北陸の政情に新たな波紋を投ずることになった。

双方の和与を不満とする越中一向一揆と、それと結ぶ越中守護代神保慶宗を討つため、同年７月、越中の不在守護である畠山卜山(尚順)※1の猶子※2勝王が、越後守護代長尾為景に越中出兵を要請し、為景がこれに応ずることになったのである。

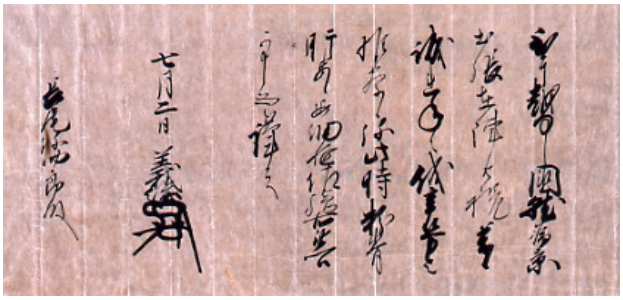
当時越中では、神保慶宗の政治的台頭によって、先に遊佐慶親・神保慶明等の有力守護被官が国外に追われ、畠山氏の守護支配の実質は、放棄されたに近い状況にあり、その頃、勝王は隣国加賀に滞在し、越中入国の隙を窺っていた。

長尾為景の越中出陣

一方、越中の隣国能登の守護畠山義総は、こうした情勢のなかで、越中守護家との同族的立場からこの事態を傍観するわけにはいかず、同年冬頃から調停工作を重ね、翌16年４月頃にはいったん争乱を回避した。そのため、３月上旬に予定していた為景の越中出陣は延期されたらしい。

だが同年10月に至り、為景の越中進攻が敢行され、越中・越後国境の境川（朝日町）で、神保慶宗方を撃破し、次いで真（万）見・富山（富山市）に進撃し布陣した。その後、慶宗の詰城である射水郡二上山の守山城（高岡市）の麓に進んで放火し、同城を落城寸前の状態にまで追い込んだ。しかし能登口から守山城に迫った能登畠山勢の数百人が討死して敗北したことと、寒気到来の季節になったため、為景はいったん越後に帰国することになる。

守山城は、小矢部川左岸の二上山の支峰に所在し、山上からは射水平野一帯を眺望できる天然の要害で、射水・婦負両郡の守護代であった神保氏の軍事的拠点となっていた。また為景の出兵は、慶宗＝一向一揆方との抗争に敗れ、越後・飛騨・能登などの各地に逃れ



畠山義総書状（上杉家文書、米沢市立上杉博物館蔵）
義総が為景の一族長尾房景にあてた書状。為景の越中進攻に応じ、連携を図ることを伝えている。

※１　畠山氏は、細川氏、斯波氏と並ぶ三管領家として勢力をふるった家柄で、越中のほか河内、紀伊、能登（庶流の能登畠山氏が世襲）の守護職を兼務。越中では守護は在国せず、郡守護代として遊佐氏（砺波郡）、神保氏（射水・婦負郡）、椎名氏（新川郡）を置き、統治していた。これより先、越前は斯波氏の守護代であった越前朝倉氏が守護となり、加賀は守護富樫政親を滅ぼした一向宗が主導権を握り、越後は上杉氏の守護代長尾氏が実権を掌握。後に長尾景虎が、関東管領山内上杉家の家督を継ぎ上杉謙信を名乗る。

※２　実の親子ではない二者が、親子関係を結んだときの子。

ていた越中の国人衆や、越中における守護支配の回復を企図する守護畠山尚順（紀伊在国）から、軍事的支援を求められたことが名分となっていた。

しかしその心底には、永正３(1506)年の越中一向一揆との戦いで、神保慶宗の裏切りにより、父長尾能景が砺波郡般若野の芹谷（砺波市）で討死したことへの宿怨と、越中平定後には為景に国内の一郡を与えるという、守護尚順との約諾への期待が秘められていた。さらに今回の軍事行動を通して、越中経略を成功させるためには、強力な神保慶宗・越中一向一揆包囲網をつくる必要性を痛感したものであった。

守山城の陥落と慶宗の敗死

明けて永正17(1520)年４月、長尾為景は、再度越中出陣の準備を進めると共に、守護畠山尚順に近隣の諸勢力、殊に能登守護畠山義総への軍事的赴援の斡旋を懇望した。そこで尚順は、加賀に在国する畠山勝王に近侍していた遊佐慶親と神保慶明を能登に遣わし、同族の好みをもって、義総に積極的な軍事的支援を要請した。次いで尚順は、飛騨口は斎藤二郎に、加賀方面からは加賀一向一揆の中枢にあった賀州三ヵ寺※3に、それぞれ支援を依頼し、為景の越中出馬を懇請したのである。

義総出陣の去就は、越中攻略の成否にかかわるものとされ、同年６月、尚順は再び神保慶明を能登に派遣して出馬を強く要請し、義総の日をおかず進発するとの朗報に接し、歓喜したのであった。またこの頃、越中包囲網の成立に危機感を高めた神保慶宗は、畠山尚順に帰参を申し出たが、尚順はその措置を為景に委任したため、為景はこれを拒絶し、仇敵である慶宗を討滅するため越中へと駒を進めた。同時に義総に対しても、越中出陣を懇請するに至った。それに対し義総は、畠山一族の立場から、越後の為景と長尾房景に、畠山

「新庄の合戦」の舞台となった富山市立新庄小学校付近

※３　蓮如の子弟が入寺していた本願寺の一家衆である、河北郡若松本泉寺、能美郡波佐谷松岡寺、江沼郡山田光教寺。

宗家の分国越中の鎮定を名分とする出陣に謝意を表し、自身の赴援を伝えた。

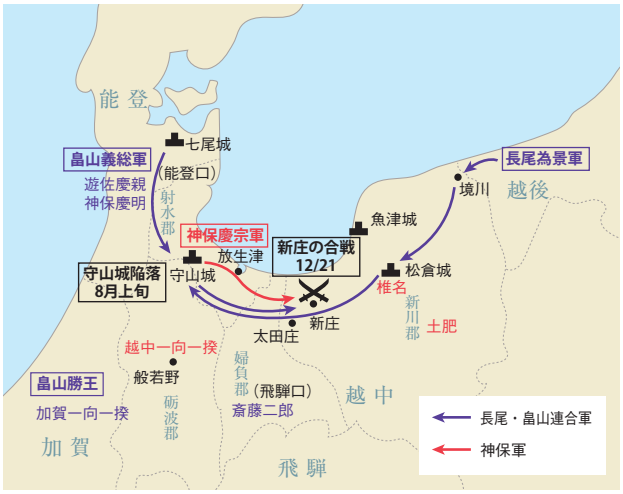
こうして為景は、能登畠山氏の軍事的支援をうけて能登口から攻め入った遊佐慶親・神保慶明勢の動きに呼応して、同年６月中旬越中に進攻し、８月３日には、調略を廻らせ境川を攻め崩した。また７月23日には、新川郡で椎名一族を撃退し、その後一気に慶宗方の拠点である守山城に迫り、８月上旬には、能登口から救援に赴いた軍勢と合流し、同城を攻め落した。

さらに12月には、守山城の敗北後、西から神通川を超えて新川郡の太田庄（富山市）に陣を布く慶宗方と、越後長尾軍が昼夜にわたり合戦を展開し、同月21日、同郡新庄(富山市)の合戦で、為景勢が大勝利を収めた。この合戦で、神保慶宗は自刃し、慶宗の与党であった遊佐・椎名・土肥の一族・被官数千人が討取られ、越中の争乱はいったん鎮定する（越中永正の乱）。

為景の新川郡守護代就任

為景は、12月24日になって、二上山北麓の射水郡の多古（氷見市）に赴き、同地に駐屯していた畠山義総と会見し、慶宗討伐の報告と、争乱の鎮静を確認した後、即日陣を撤収して越後へと帰った。為景は、越中平定の功によって、兼ねてからの約諾に従い、越中守護畠山尚順から新川郡の守護代職を付与されており、ここに越後長尾氏の越中進出の足場が築かれた。

だが越中の争乱は、これをもって止まるものではなかった。翌永正18(1521)年４月に至り、越中の一向一揆が再び蜂起し、二上要害を攻撃する動きが知られるようになる。このため為景は、再び越後から越中への出陣を迫られることになった。



長尾・畠山連合軍と神保軍の進路